第 10 回藤原正彦エッセイコンクール入賞作品　講評
（審査員　藤原正彦姫路文学館長）

【中学生部門】

最優秀賞「絵空事の世界」（小池七海さん）

幼い頃のごっこ遊びの延長で楽しむ空想世界の物語。身の回りの出来事が瞬時に小説化されてしまうというのだからすごい。うまい切り口でユニークな内容である。

「ちなみに、今現在の主人公格である少女は、ざっと六代目である」といったユーモア。そしてリズムがある。わたしの父、作家の新田次郎は「プロの作家になるには、最後まで人を引っ張るようなリズムのある文章が重要。一つの文章を１００字以上書くな」と言っていた。それを自ずとわかっているのは才能だろう。非常に感心した。

ただ、「そんなこんなで」という言葉が二か所出てくる。原稿用紙５枚程度の文章にこうした特殊な言い回しを繰り返すのは禁じ手。一度目で読者の頭にしっかり刻まれるので、再び出てくるとたるんでしまう。

優秀賞「祖父の涙」（中谷璃子さん）

おじいちゃんを最期まで看取れなかったことを悔いる作者。「祖父の手をもっと握っておけばよかった」「劣等感と罪悪感を強く感じて、気づけば遺影の角を強く握りしめた」など、その感情が細やかに表現された見事な文章である。生前おじいちゃんがどんな人だったのかが書かれていれば、もっとその死を悲しむ気持ちが浮き彫りになったのではないか。

非常によく書けているが、死を扱ったエッセイは必ず感動的になるのでそれを割り引いて評価した。

佳作「十三歳の私達」（安賀奈穂さん）

ネパールの社会を、自分と同年代の少女たちの境遇を通して非常に行き届いた眼で観察している。質の高い文章である。ただ最後の部分、「私一人の力は小さいけれど、私の培った力が他の誰かの力と一緒になって活かせるように、まずは自分の力を蓄えたい」といった“いい子”すぎる締めくくり方をしているところが惜しい。平凡になってしまう。もう少し工夫すればもっと良くなるだろう。

【高校生部門】

最優秀賞、優秀賞、佳作、いずれも同様の高いレベルでびっくりした。

最優秀賞「日常のかけら」（杉本　英さん）

名エッセイ。これまでスマホやインターネット、つまり虫眼鏡と望遠鏡でしか世界を見ていなかった作者が、それら二つの間にじつは生活のかけらがあちらこちらに散りばめられていることに気づき、人生観が変わってゆく。よくぞこれを捉えたと思う。

バスに乗り込んだ際のなんとなくモヤモヤした気分の理由を四つも挙げるあたり、自己分析が鋭い。子供の頃には見えていたはずの風景を見落としていたことに思い至るまでの叙述は女流作家のよう。「多くの人の日常のかけらが私に元気を与えてくれる」―モノを主語によくこのようなうまい文章が書けたものだ。才能豊かな人である。

優秀賞「街の「小場所」が残してくれたもの」（足立美咲さん）

広島から兵庫県尼崎の書店の店主に会いに行く。その行動だけでも大変なことだ。

「ありえない角度に折れ曲がった腰を手で支えながら」とはなかなか面白い表現。二か月後に閉店することを告げられて「彼女自身も本当はそれを伝えるつもりはなかったのだろう」と受け止めたのは大した洞察力。町の本屋がまたひとつ消えてゆくことへの寂しさがよく表れている。

佳作「十九歳の母と私」（桂　凛香さん）

母が今の自分の年に近い 19 歳で自分を産んだことに思いを馳せる作者。自分のために母が何らかの将来を諦めたであろうことへの負い目、愛情と尊敬と感謝。さまざまな気持ちが入り混じり、それが時に反発にもなる。そうした母との葛藤、なかでも中学生の頃の不安定さがよく書けている。父親についても何か触れられていれば、さらに重層的になっただろう。

【一般部門】

最優秀賞「母の終活」（山本　築さん）

ほのぼのとした作品。母への想いが溢れる内容でありつつ、軽い上品なユーモアがそこかしこに隠されていて、それがちょうどいい塩梅をみせている。たとえば、訪れた寺院で母が「あまりに長く手を合わせているため、こちらが不安になるほどだった」というくだり。また、母自身もユーモアの持ち主。「あんたに親孝行でもさせてやろうと思ったとたい」。福岡弁もいい。

技巧的にも、山上での「まるで霊界から下界に臨んでいるような」と、下山後の「ひさしぶりに浮世の空気を吸ったような」とを呼応させている点を評価したい。自ずと腑に落ちる巧妙な終わり方である。

優秀賞「何もない春」（吉沢慎一郎さん）

作者はカメラマンであるせいか、全編を通して色彩感覚がじつに見事である。「さいはての岬から見る夕暮れの海は、柔らかくて細やかな金箔を敷き詰めたように、澄んだ黄金色に光り輝いていた。空が、穏やかに暮れてゆく。赤っぽい紫から、青っぽい紫へ」云々というように。自然描写が上手いのは一種の才能である。「何もない春を、ふたりで見に行こう」と最後も感動的。ややセンチメンタルな感じもするが、素晴らしい作品である。

佳作「地下鉄のクリスマス」（茂木麻予さん）

クリスマスイブのニューヨークの地下鉄でのひとコマ。泣き止まぬ赤ん坊を抱いた黒人の少女と、彼女に近づく一見ハードな風貌の白人女性。これから何が起きるのだろう…というサスペンスドラマを見ているような緊迫感から、意外な展開を経て和やかな光景へと移行する。その間の観察が非常に鋭い。「信仰のない」作者が敬虔な思いに至ったという、その終わり方もいい。